

教本・図書資料委員会 報告

『美術資料』（2022年改訂版）の編集にあたって —『美術資料』を通して研究会が果たす役割—

横田 学

1. はじめに

2022年度改訂版『美術資料』鑑賞編の改訂作業については、2019年9月頃から取りかかり、教科書や表現編の改訂に対応する内容の整理や既存ページのテーマ内容の見直し、さらに資料性を高めるための工夫などについて検討を進め、2021年度に入り最終的な作品の決定やテキスト及びレイアウト修正などを実施した。刊行は2021年4月の予定であったが、コロナ禍等による諸般の事情で2022年度に延期された。

『美術資料』は、文部科学省検定済教科書¹（以下「教科書」という。）を補完する役割を担う中学校美術科の副読本²として編集している。それ故、基本的に学習指導要領の改訂とそれに伴う教科書の改訂と連動して改訂を実施してきた。折しも、GIGAスクール構想の前倒措置³や学習者用デジタル教科書⁴を制度化する「学校教育法等の一部を改正する法律」⁵等関係法令の施行など、教科書の姿や在り方が変化する節目の時期となっている。本稿では、今回の『美術資料』の改訂を終え、今後の方向性を見通すためにも、これまでの改訂の経緯等をふり振り返り、研究会が『美術資料』の編集を通して、どのような役割を果たしてきたのか、また果たしていかなければならないのか考えてみたい。

2. 『美術資料』改訂の歴史

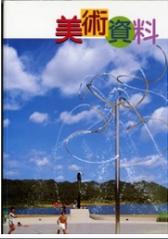
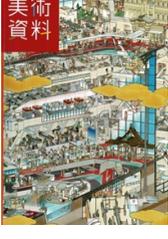
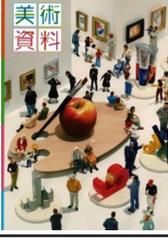
改訂の経緯等については改訂の度に研究誌「美」で報告している。これらの報告と、平成10年度以降の学習指導要領告示の概要や施行、教科書及び『美術資料』の改訂を時系列に整理してまとめたものが【表-1】である。学習指導要領の改訂はおおむね10年に一度実施される。教科書は、通常4年毎に改訂の機会が文部科学省によって設けられるが、新しい学習指導要領の施行時には必ず教科書改訂が行われるため1～2年の増減がある。副読本は編集を終えた次の年度には使用されるが、教科書は検定及び採択期間があるため、実際に使用されるまでに2年以上の期間を要することとなる。

【表 -1】 学習指導要領改訂及び教科書改訂と美術資料

学習指導要領		教科書	美術資料		研究誌「美」での報告等	
告示	施行		改訂年	改訂年		表紙
平成 10 年度 (1989)	2002	○内容 A 表現の項目として「絵画」「彫刻」「デザイン」「工芸」として示されていた表現分野を、「絵や彫刻」と「デザインや工芸」の2つにまとめた。 ○表現の内容に具体的に漫画、イラストレーション、写真、ビデオ、コンピュータなど映像メディアによる表現が明記された。 ○独立した鑑賞の授業の充実	2002	2001	新宮晋	美 151 号 美術鑑賞教本編集委員会活動報告 田中佳洋
			2006	2007	須田悦弘	美 173 号 美術鑑賞教本「美術資料 (2007 年度改訂版)」の編集を終えて 太田智子、田島達也、中田誠、光畑寿子、峯山聡、横田学 美 176 号 『美術資料』改訂から1年—まとめと今後の課題— 太田智子 学習指導要領の改訂と鑑賞教育—中学校美術科の改定内容と『美術資料』— 横田学
平成 19 年度 (2007)	2012	○内容に A 表現と B 鑑賞の各活動ににおいて、共通に必要な資質や能力として〔共通事項〕新設する ○内容 A 表現の項目として、(1) 感じ取った事考えたこと〔絵や彫刻〕の発想、(2) 伝える使うなどの目的や機能〔デザインや工芸〕の発想、(3) 発想や構想したことなどを基に表現する技能の3つに整理 ○B 鑑賞において美術文化に対する学習や批評し合ったりするなどの言語活動を充実	2012	2012	ピカソ	美 188 号 『美術資料』(2012 年改訂版) の編集にあたって 太田智子、横田学 美 189 号 『美術資料』(2012 年改訂版) の編集にあたって(その2) 田島達也、今江寿子
			2016	2016	山口晃	美 200 号 『美術資料』(2016 年改訂版) の編集にあたって 今江寿子、太田智子、田島達也、横田学
平成 28 年度 (2016)	2021	○造形的な見方考え方を働かせ、表現及び鑑賞に関する資質・能力を相互に関連させた学習の充実を図る ○A 表現及び B 鑑賞の指導においては相互に関連を図り、特に発想や構想に関する資質・能力と鑑賞に関する資質・能力とを総合的に働かせて学習が深められるようにすること。	2021	2022	田中達也	美 217 号 (今号・この原稿) 美 218 号 (次号・改訂の具体的な内容等について各執筆者が寄稿予定)

このように『美術資料』は、学習指導要領及び教科書の改訂に連動して改訂してきた。改訂の詳細については、上記の表中に示した研究誌「美」の各号を見て頂くのがよいのであるが、その概略をまとめたのが【表 -2】である。

【表-2】『美術資料』各改訂の概要

改訂	表紙	内容等
平成 13年 (2001)		『美術資料』 表紙：新宮晋 A4 165頁 定価¥720 扉表紙：美術館での中学生鑑賞授業風景 鑑賞部分の扉表紙が復活し2頁増、71頁となる。「美術の鑑賞」の国会編の刊行としての独立性が高まる。 ○H10年版のテーマ、図版全面改訂、伝統工芸、社会福祉、地球環境、世界遺産、美術館、博物館を積極的にとり上げ、作品精選、余白を生かすレイアウト、折込み大画面はゲルニカと伴大納言絵巻、年表10頁図版大型化など。 ○編集：峯山聡、田中佳洋、草尾和之、北島智子、(川村善之)
平成 19年 (2007)		『美術資料』 表紙：須田悦弘「泰山木一花」 A4 165頁 定価¥720 鑑賞部分の扉表紙：ピカソ「ゲルニカ展示風景」 ※一般図書 つくる・見る・学ぶ「美術のきほん」定価¥1,800としても出版 ○H13年版を全面改定、21のテーマに芸術家の生き方(レオナルド・ダ・ヴィンチ、ピカソ、伊藤若冲、岡本太郎、森村泰昌、ひびのこづえ、須田悦弘、ロビン・ロード)、世界の文化遺産、日本の文化遺産、京都・奈良の文化財、美術館へ行こう、美術から広がる仕事を加える。年表10頁。 ○編集：太田智子、峯山聡、中田誠、光畑寿子、田島達也、横田学
平成 24年 (2012)		『美術資料』 表紙：ピカソ A4 165頁 定価¥740 巻頭大判折込：小野竹喬「奥の細道句抄絵 田一枚植えて立ち去る柳かな」、裏面アントニ・ガウディ「ゲル公園」 鑑賞部分の扉表紙：ピカソ「ゲルニカ展示風景」 ○H19年版の部分改訂に新規に琳派、洋画と日本画、手づくりの技、彫刻の4タイトルを追加、内容の関連する頁を示すリンク情報を明記 ○編集：今江寿子、太田智子、田島達也、横田学
平成 28年 (2016)		『美術資料』 表紙：山口晃 A4 183頁 定価¥740 巻頭大判折込：「鳥獣人物戯画 甲巻」鑑賞部分の扉表紙：ミケランジェロ「アダムの創造」 学習指導要領〔共通事項〕に対応し、巻頭に表現及び鑑賞に共通となる内容を「美のガイダンス」としてまとめる。 ○H24年版の部分改訂に新規に日本の伝統色、日本の伝統文様の2タイトルを追加 ○編集：今江寿子、太田智子、田島達也、横田学
令和 4年 (2022)		『美術資料』 表紙：田中達也 A4 189頁 定価¥760 巻頭大判折込：ゴッホ「ひまわり」、鑑賞部分の扉表紙：「阿修羅像」 ○H28年版の部分改訂に新規に抽象と単純化、を追加、世界の仮面と祭り、伝えるデザインを各1頁を2頁に、パブリックアートを体感する美術に内容変更、外部補助資料活用のための二次元コード(QRコード)を配置、各テーマ毎に「主体的で深い学び：試してみよう・調べてみよう」を頁下に示すなど。 ○編集：今江寿子、太田智子、村田和久、森本由紀子、飯田真人、横田学

【表-1】と【表-2】を対応させて見るとともに、研究誌「美」で報告した改訂のポイント等について見てみる。

(1) 平成 13 (2001) 年版及びそれ以前

美術鑑賞教本の刊行は、本会の重要な事業のひとつとして、1954 (昭和 29) 年から継続して行われている。美術鑑賞教本編集の総括的な歴史等については、また別の機会に述べることにし、ここでは現行の『美術資料』の生い立ちについて述べておく。

美術教育研究会 50 年のあゆみ⁵における川村善之氏の記述では、平成元 (1989) 年発行の「美術の表現と鑑賞」を『美術資料』のルーツとしている。この「美術の表現と鑑賞」は、研究会が鑑賞資料として刊行していた『新しい、日本・西洋「美術の世界」』を元にしたものと秀学社が刊行していた絵画、彫塑、工芸デザインの表現技法に関する参考書とを合本したものであった。しかし、この「美術の表現と鑑賞」は、『美術資料』と並行して近年まで刊行されており直接のルーツと言うより『美術資料』刊行の契機となったものだと考えられる。『美術資料』が新刊として出版されるのは、平成 3 (1991) 年発行の『『美術資料』表現と鑑賞』⁶である。その後平成 5 (1993) 年、平成 7 (1995) 年、平成 10 (1998) 年の改訂を経て【表-2】平成 13 (2001) 年版に至ることとなる。

美 151 号で田中佳洋氏は、平成 10 (1989) 年度改訂学習指導要領に対応する 2001 (平成 13) 年版『美術資料』の編集に関わり、特に研究会教本編集委員会⁷が積み重ねてきた「テーマによる美術鑑賞」の目指すものについて以下のように述べている。

美術作品を見るのに、作者がだれで、いつの時代で、様式がどうだと、知識から入るのではなく、あくまでも作品そのもののよさを感じるところから出発できるように、そのきっかけをつくるのが目的です。

「美術鑑賞＝美術史の知識理解」と考える事が当たり前であった往時の鑑賞教育に対し、作品に見られる造形の要素や表現の方法 (工夫) をテーマとした美術鑑賞教育の教育現場への提案を 目的に編集を進めているのである。特に、この作品に見られる造形の要素への着目については、平成 28 (2016) 年度に告示された現行学習指導要領の中心的な考え方として学習指導要領解説⁸に以下のように示されていることを特筆したい。

美術科の学習は、様々な形や色彩などの造形と、想像や心、精神、感情などの心の働きとが、造形の要素を介して行き来しながら深められる。造形的な視点を持つことで、漠然と見ているだけでは気付かなかった身の回りの形や色彩などの働きに気付いたり、よさや美しさなどを感じ取ったりすることができるようになる。造形的な視点とは、美術科ならではの視点であり、教科で育てる資質・能力を支える本質的な役割を果たすものである。

研究会がこの「テーマ別の鑑賞資料」の作成を開始したのは1973（昭和48）年に遡り、約半世紀の歴史をもつものである。このことは、研究会の諸先輩方が積み重ねてこられた美術鑑賞教育研究が、いかに先進的なものであったかを証明するものでもある。

(2) 平成19（2007）年版

美173号では、改訂版の編集に際し以下のように報告している。

先ず具体的な編集作業に入る前に、現場意見のアンケート調査の整理・分析を行った。このアンケート調査は秀学社営業部が、前版『美術資料』を採用している先生方を対象に調査したもので、実際に指導される立場からの厳しい意見が寄せられている。

前版までの『美術資料』鑑賞編は、確かに「テーマによる美術鑑賞」など時代を先取りしたものであったが、教育現場からはその敷居の高さについても指摘されたのである。学習指導要領でも強調された「独立した鑑賞の授業」を意識した「テーマによる美術鑑賞」の提案は、研究熱心な多くの先生方の支持を得たが、同時に多様な生徒、学校や地域の実態に応じた柔軟さや汎用性もさらに求められたのである。このことに対し改訂では、編集の基本的な考え方として以下のようなポイントを示している。

○掲載作品の選定にあたっては、生徒の想像力を広げるような物語性のあるものを中心に、どのテーマにも現代の作品へつながるような、また見方を広げるようなものを入れることを配慮する。

○解説については、生徒ひとりひとりに「見る→考える→話す」などと思考することを促し読み物としての興味を引きつける内容づくりを心がける。

前版の平成13（2001）年版の良さを残しつつも、楽しく親しみやすい鑑賞編を目指して多くのテーマを改善した。以後、最新刊の令和4（2022）年版まで、鑑賞編についてはこの版を基本として部分改訂や増補を行うこととなった。さらに、この版については、一般図書『つくる・見る・学ぶ「美術のきほん」』としても出版されている。

(3) 平成24（2012）年版

この改訂では、平成19（2007）年度告示の学習指導要領に対応して、A表現とB鑑賞の各活動において、共通に必要な資質や能力としての〔共通事項〕及び美術文化（特に我が国の文化）がキーワードとなった。

美188号では、編集の概要と今後の課題を以下のように報告している。

○〔共通事項〕の形や色などの造形要素を捉えることと、形や色などをもとにイメージをもつことを意識して、巻頭ページを「美術を通して、学ぶことの意味を考えられるページ」を目途に検討し、小野竹喬『奥の細道句抄絵 田一枚植系て立ち去る

柳かな』を選んだ。さらに、表現と鑑賞を相互につなぐ役割として内容の関連するページを示すリンク情報を明記することとした。

○美術文化に関わり「日本美術のよさを多角的に伝えられるページ」などを目途に、

- ① [琳派] 時代を超える「かたち」の魅力
- ② [洋画と日本画] 西洋との出会い
- ③ [手づくりの技] 地域の素材を生かす手仕事

などを加えるとともに、[彫刻] 形にこめた思いも追加し、これまでの鑑賞編に不足していた内容を増補する改訂とした。

なお、改訂後の今後の課題として以下のように示している。

副読本としてのあり方を、今後は特に考えていかなければならない。この4月からの新しい教科書の傾向として、資料集的な性格が強いと感じるからである。この『美術資料』のように、表現編との合本の場合、教科書と副読本のそれぞれの役割をもっと考えていく必要がある。

研究会が長年研究を続けてきた「テーマによる美術鑑賞」や「生徒の興味関心や想像力を広げるユニークな内容」は、広く多くの学校、先生方に支持されるようになるとともに、教科書にも同様の方法や内容が取り上げられるようになり、教科書と『美術資料』の違いや役割分担が何なのか問われるようになってきたのである。

(4) 平成 28 (2016) 年版

平成 24 (2012) 年版の編集までは、表現編は東京の編集部、鑑賞編は研究会が大阪の編集部とともに進めるスタイルであったが、この版から表現編も鑑賞編も共に大阪の編集部が担当することになり、研究会が編集に関わるのは鑑賞編のみであるが、表現編と鑑賞編の連携や分担などの調整が円滑となった。

美 200 号では、この改訂のポイントとして以下のように報告している。

改訂に際し、全国各地で現場の先生方を対象に意見聴取会を実施した。これらの意見聴取において特に大きな問題はなかったため、鑑賞編については以下のように部分改訂を行った。

- ① 他社発行の副読本の分析から、新設テーマについて検討した。その際、現行本の表現編で扱っている「日本の伝統色」のページについては、(中略)「和の文様」とあわせて(鑑賞編の)2つのテーマとして新設した。
- ② その他、部分改訂の内容としては、現行本の分析の中で出てきた解説文の修正や図版の見直し、レイアウトの変更、美術史年表の図版入れ替え、また、教科書改訂に伴う掲載作品の変更などを考慮しながらの作品選定、テーマ配

列の変更などを実施した。

この時の改訂では、学習指導要領〔共通事項〕に対応し、巻頭に表現及び鑑賞に共通に必要な内容を「美のガイダンス」としてまとめるなど、『美術資料』全体の構成や体裁も大きく変わり全面改定となった。しかし、鑑賞編については、前述のように平成 19（2007）年版以来の部分改訂や増補に対して、教育現場からは好意的な評価を得ることができており、2つの新設テーマ以外に特に大きな変更等は実施しなかった。

(5) 令和 4（2022）年版

今回改訂した具体的な内容については、次の美 218 号で各ページの執筆者から報告することになるが、その概要は以下のとおりである。

- ① 教科書と重複する図版などの差し替え
- ② 表現編の「抽象絵画を描く」を鑑賞編の「単純化・抽象化」（平面・立体）を新設
- ③ ②に伴い「抽象美術への道」を整理し「とらわれない表現」に
- ④ ②に伴い「彫刻」のページを具象彫刻に絞り、抽象彫刻は「単純化・抽象化」に
- ⑤ 「世界の仮面」（1 ページ）を「世界の仮面と祭り」（2 ページ）に
- ⑥ 「平和のポスター」（1 ページ）を「伝えるデザイン」（2 ページ）に
- ⑦ 「パブリックアート」と「今日の美術」を「新しい美術」と「今日の美術」に整理

さらに、資料性を高めるため、図版等の量と質の両面からの増強することなどであった。しかし、特に①については平成 24（2012）年版の今後の課題にある「教科書の資料集化は益々進み、教科書と副読本としての『美術資料』の違いをどのように考えるのか」がさらに大きな課題となってきていることを示すものでもある。

なお、この版では GIGA スクール構想などへの対応としてインターネット上の外部補助資料活用のための二次元コードの配置や、主体的で深い学びに対応する「試してみよう・調べてみよう」の問いかげや発展課題を各テーマ毎にページ下に示すなどの改善も実施した。さらに、秀学社から『デジタル版美術資料』も刊行されることとなった。

3. まとめにかえて

京都市立芸術大学美術教育研究会が、長年にわたり進めてきた美術鑑賞教育の研究の成果が、副読本（教本）の刊行という手段で教育現場に提案され、日本の美術鑑賞教育の充実寄与してきたことは前述のように明らかである。故に、『美術資料』などの編集をとおして培ってきたアイデアやユニークな内容が、学校現場の授業改善に繋がり、結果として教科書などにも影響を与えたことは、研究成果を社会に普及できたという点では喜ばしいことである。

しかし、同時に教科書の内容に、これまでの『美術資料』の内容が含まれるようになり、その違いや棲み分けが強く求められるようになってきていることも事実である。この事に対し、単に教科書との違いを模索するのではなく、研究会の諸先輩方が常に取り組んでこられた教育現場への絶え間ない「新たな提案」に習い、これからの社会の変化を展望した教育研究を進める事が必要である。そして、今後の美術教育を創造・変革するためには、どのような事が求められているのかを見通し、研究・検討したことを具体的な形にして教育現場に示すことこそが、私たちに求められている事ではないだろうか。

(京都市立芸術大学 名誉教授)

*1 文部科学省検定済教科書

学校教育本に規定され、学校教育のうち、初等教育の課程、中等教育の課程（高等専門学校の課程を除く）に用いられる、文部科学大臣の検定を経た図書のことである。一般的には「教科書」

*2 副読本

文部科学省検定済教科書以外の小中高等学校および特別支援学校において、授業で使用されることを目的として発行された図書。主に、①教科書がない教科等の教科書の代わりとして使用されるもの（総合的な学習（探求）の時間 など）、②教科書を補完するもの（社会科資料集など）、③特定の教科に含まれないが学校で使用されるもの（交通安全資料など）が含まれる。『美術資料』は②に該当する。

*3 GIGA（Global and Innovation Gateway for All）スクール構想

2019年12月に文部科学省から発表されたプロジェクト。小学校の児童、中学校の生徒1人に1台PCと、全国の学校に高速大容量の通信ネットワークを整備し、多様な子どもたちに最適化された創造性を育む教育を実現する構想。新型コロナの影響から、令和2年度(2020)の補正予算で、当初の令和5年度(2023)に達成するとされている端末整備の前倒しを支援、令和元年度補正措置済（小5.6、中1）に加え、残りの中2.3、小1～4すべてを措置することとなった。

*4 学校教育法等の一部を改正する法律

令和2年度から実施される新学習指導要領を踏まえた「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善や、特別な配慮を必要とする児童生徒等の学習上の困難低減のため、学習者用デジタル教科書を制度化する関係法令が平成31年4月から施行。

*5 美術教育研究会 50年のあゆみ

研究会の50周年を記念して編集・発行、<https://www.kyogei-bkk.jp/> で公開している。

*6 平成3（1991）年版『美術資料』表現と鑑賞

A4 129頁 定価：¥600 鑑賞部分は後の46頁。鑑賞編の内容は『新しい日本・西洋「美術の世界」』を量的に圧縮

平成5（1993）年版『美術資料』表現と鑑賞

A4 133頁 定価：¥650 巻末に美術館頁を4頁増

平成7（1995）年版 表現と鑑賞『美術資料』

A4 157頁 定価：¥670 鑑賞部分は後の54頁、31より8頁増、総頁増の中で、巻頭に東京編集鑑賞21頁入る。巻末に初の索引2頁増。

平成10（1998）年版『美術資料』表現と鑑賞

A4 157頁 定価：¥690 鑑賞部分54頁に巻頭部分5頁を追加H7年版を全面改訂、福祉と造形、パブリックアート、世界の文化遺産、などの新テーマ、世界美術年表に131の図版を入れ、日本、世界的美術館案内に86図版を入れる。

*7 教本編集委員会

平成14年6月29日の会則改正までは、現行の「教本図書資料委員会」は「教本編集委員会」として位置付けていた。

*8 中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 美術編、p.11、平成30年3月30日、文部科学省